

国家プロジェクト



SIP

戦略的イノベーション創造プログラム

Cross-ministerial Strategic Innovation Promotion Program



国立研究開発法人

土木研究所

PUBLIC WORKS RESEARCH INSTITUTE

SIP第3期課題シンポジウム2026共催

新技術の社会実装 目指し約1000人参加

内閣府・土木研究所

内閣府と土木研究所は7月31日、東京・千代田区の秋葉原コンベンションホールで「SIP第3期課題『スマートインフラマネジメントシステムの構築』シンポジウム2026」を開催した。テーマは「未来を力に実装戦略」現場で使える新技術」。研究者や自治体、施工会社、コンサルタントなどインフラ関係者がハイブリッドにより1000人超が参加し、新技術を社会に実装させる重要性を共有した。

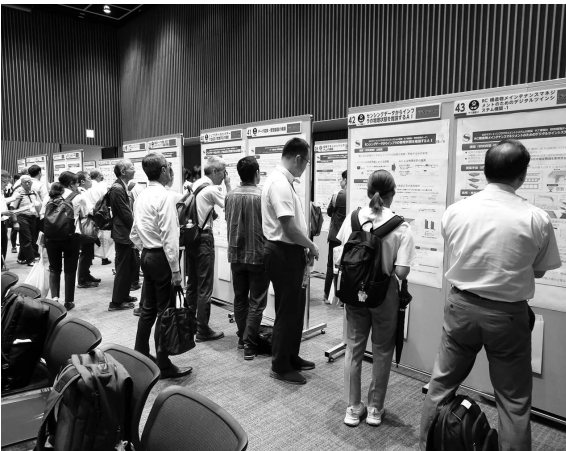
人のつながりや制度 標準化など課題共有

2023年度から27年度までの5年間で対象としたSIP第3期課題「スマートインフラマネジメントシステムの構築」は、デジタルデータにより設計から施工点検補修まで一貫した管理を行い、持続可能な魅力ある国土都市地域づくりを推進するシステムを構築するもの。「未来の建設技術」、「未来のインフラ」、「未来のまち」をテーマとした5課題に137研究機関から延べ1031人の研究者が参加している(26年5月時点)。

シンポジウムは、若手技術者によるワークショップやグリーンインフラをテーマとしたセミナー、パネルディスカッションを皮切りに、土木研究所の藤田光一理事長がガッツポーズで開会宣言。内閣府の南部智一政策参与・プログラム統括チーム長がビデオメッセージで登場し「技術のゴールは、現場で使われること」と歓迎する。続いて久田真一東北大学大学院工学研究科インフラ・マネジメント研究センター長が挨拶し、「日本政府が提唱するSociety 5.0(人間中心の超スマート社会)を迎えるまでに、インフラの老朽化問題を解決しなければならない」と強調した。



「Society 5.0を迎えるまでに、インフラの老朽化問題を解決しなければならない」と強調する久田教授



67項目に及ぶポスターセッション



ポスターセッションの首都高ブースでは新素材の軽さに驚く人が続出



若手技術者によるワークショップ

注目を集めたのが、2会場に分かれて行われたパネルディスカッションだ。ホールでは「制度で動く！インフラ技術の最前線」国での制度化による社会実装」5階会場では「現場を変えて！新技術導入のスムーズ」地方自治体における新技術の社会実装」をテーマに議論。単に優れた技術を開発するだけでは社会実装化・ルール形成、DX、グリーンインフラなど、幅広いテーマについて、観客と共に新技術の「社会実装」に向けた具体策を考えた。また、SIPの各研究課題については、67項目のポスターセッションが行われ、研究者と観客が直接会話し、質疑応答できる有意義な時間も。首都高速道路と長岡技術科学大学が共同研究する、軽く錆びない新素材「バサルトFRP」ロッドを用いたコンクリート構造物の高耐久化と性能評価手法の開発」など、活用事例が目に見えるコーナーが賑わいを見せた。

「SIPの点検により費用が3500万円浮いたという話もあった。社会実装へのやる気を起こすような好事例を世の中に発信することが大事」、「技術の翻訳家とマネジメントできる土木家を育てることが重要」、「人のネットワークが大事、良いネットワークをつくる必要性を感じた」といった声が寄せられた。閉会挨拶では、内閣府プログラム統括チームの栗野盛光慶應義塾大学経済学部教授が、公共財であるインフラの制度化の重要性や、社会実装において、SIPで整備した技術・制度・事業・社会受容性・人材の5つ視点の活用を呼びかけ、参加者の活躍とSIP全体の発展を祈念して締めくくった。



2会場に分かれて行われたパネルディスカッション

浅川智恵子教授による基調講演

目の見えない研究者、浅川智恵子氏(慶應義塾大学理工学研究科特任教授)曰く「持てず困った体験から着想した新技術で、センサーやカメラを搭載したスーツケースが周囲の景観なども紹介しながら行きたい場所やすき、社会実装への期待が一体となり大きな感動を呼んだ。演目は「AIスーツケースの研究開発と社会実装への挑戦」未来の移動支援を紹介された。

感動！新技術



目の見えない人に希望を与える新技術で感動を呼んだ浅川教授の基調講演

「関西万博では目の見えない人たちのデモも行われ、「こんなに早く歩けた」、「快適だ」と大好評。『大きくなったこのスーツケースと一緒に遠くへ行きたい』と話す小学生の子どももいた。

「関西万博では会場内を大層リノックも含めてくまなく歩けた」と話す浅川教授。AIスーツケースが社会実装されるその時に向けて、①点字ブロックに代わる平坦なセンサー付き道路はできないか、②電車とホームの間を無くすアイデアはないか、③使う人やものによって形を変えるエスカレーターの発明について、道路行政関係者に要請する一幕もあった。